

「コア」による格助詞の指導 その1

矢 沢 国 光 （ろう・難聴教育研究会）

〔0〕はじめに

4月小研究会「デンマークの子育て」で、講師の澤渡ブランド夏代さんは、子どもが何か困ったことをしたとき、日本では「子どもに話す」が、デンマークで「子どもと話す」と言われました（本号掲載の講演記録参照）。

「子どもに話す」だと、大人が一方的に子どもに対して注意する感じですが、「子どもと話す」だと、大人と子どもが向き合って対話する、という感じになります。澤渡さんは、たった一字のちがいで——格助詞の「に」と「と」のちがいで——で、デンマークと日本の子育ての姿勢のちがいを鮮やかに対比して見せました。

聴覚障害児に対する格助詞の指導の目標は、「子どもに話す」と「子どもと話す」の意味の違いがわかるようになることにある、といってもよいでしょう。

聴覚障害者にとって助詞の習得は、古くて新しい課題ですが、外国人の日本語学習者も、

・家で主人に[→を]待つ。

・対策を取りこむ[→に取り組む]。

のような誤用をするそうです^{*1}。外国人に対する日本語指導がいま盛んになっていますが、格助

1	はじめに
2	同音異義語と多義語
3	多義語の分析
	(1)「掛ける」の基本的意味——ネットワーク・モデル
	(2)ことばの獲得・習得・使用に役立つ多義分析とは——コア論
4	英語基本動詞のコア
5	日本語動詞のコア
6	コア理論の日本語学習への応用
	(1)複合動詞の指導への応用 以上前号
	(2)コアによる格助詞の指導その1（本号）
	〔0〕はじめに
	〔1〕格助詞とは
	〔2〕格助詞の発達
	〔3〕いくつかの格助詞の「コア」
	[途中まで]

詞の「コア」意味を使って指導する試みも始まっています。英語学習では、格助詞に似た前置詞の用法について、コア理論を用いた指導法が実践されています。前回紹介した NHK テレビ講座講師・田中茂範「新感覚☆キーワードで英会話」です。その続きの「新感覚☆わかる使える英文法」が今年4月から放映中です。

〔1〕格助詞とは

◇格助詞と語連鎖

「格助詞」の中でも、

ママのエプロン

のような、名詞に係るものは除き、

ママと 上野から 浅草まで 電車に 乗った

のように（名詞＋格助詞）（動詞）の形（語連鎖）

*1 杉村泰、認知イメージに基づく格助詞の指導

で使われる場合を取り上げます。

日本語の文〔単文〕は、

(名詞1 + 格助詞1) (名詞2 + 格助詞2) …
… (動詞)

という語連鎖の繋がり (多語連鎖) と見ることが出来ます。

また、子どもの発話する文の発達は

一語文 ⇒ 二語文 (語連鎖) ⇒ 多語文
(多語連鎖)

と見ることが出来ます。したがって、

(名詞 + 格助詞) 動詞

という最小の語連鎖 (二語連鎖) は、子どもの文の発達の出発点と考えられます。

◇ 「格助詞」は名詞に付くか動詞に付くか

「格」とは、もともとは西欧語文法の「名詞の格 case」(文の中での名詞の役割) からきた言葉です。ドイツ語を学んだ経験のある方は、「父」を表すのに、いちいち *der Vater* 父が (主格)、*des Vaters* 父の (属格)、*dem Vater* 父に (与格) *den Vater* 父を (対格) などと、形が変わってしまうのに、面食らったおぼえがあると思います。ドイツ語では、名詞の格を、冠詞と名詞の語形変化で表しています。

このように、西欧語文法で、名詞の変化として「格」が入ってきたために、日本語の格を「名詞の変化」として、見るのが一般的です。しかし、格助詞を、その前にある名詞に付くのではなく、その後ろにある動詞に付くと見ることが出来ます。つまり、「学校に 行く。」と見ることが出来るし、「学校 に行く。」と見ることが出来ます。どちらの捉え方がよいでしょうか。

◇ 「格」は何によって決まるか？

そのためには、もう一度「格」とは何かに立ちかえって、考えてみましょう。

格は「文の中での名詞の役割」と言いましたが、「役割」とは何でしょうか。

例えば、「電車」+ (さまざまな動詞) を見てみましょう：

電車まで歩いた。…「電車」の役割は、

どこまで「歩いた」か——限界——を示す。

電車がきた。…「電車」の役割は、何が「きた」か——主体・動作主——を示す。

電車に乗った。…「電車」の役割は、何に「乗った」か——動作の着点——を示す。

電車で行った。…「電車」の役割は、「行った」ときの手段を示す。

電車から降りた。…「電車」の役割は、何から「降りた」か——起点——を示す。

このように、名詞「電車」の役割を規定しているのは、「電車」に続く動詞です。動詞が、名詞にある役割を要求し、どんな役割を要求するかを、名詞の後置詞としての格助詞によって示す、ということになります。格助詞を、「(動詞と切り離された) 名詞の語尾変化」として見るよりも、動詞との関係において——「語連鎖」の中で——考えた方がよい、というのは、この理由によります。

[2] 格助詞の発達

ことばはコミュニケーションの手段です (第2回 2005年6月号)。だから、ことばの発達は、子どものコミュニケーションの発達の一部です。そして、さらにさかのぼれば、コミュニケーションの発達は、子どもと周囲の関わり・認知の発達と言うことになります。したがって、格助詞の発達は、言葉の出る以前あるいは言葉の最初期——したがって格助詞が出現する以前——から見ていく必要があります。

第一段階 格助詞以前

(1) 動詞だけ、または名詞だけ [一語文。ただしこれには視線・身振りなどの非言語要素が加わっているのが普通]

(2) 名詞 + 動詞 [格助詞を欠く二語文]

第二段階 名詞 + 格助詞 + 動詞の二語連鎖
多語連鎖

第三段階 格助詞を使い分ける

格助詞のちがいで文のニュアンスがどう変わるか、学習するのは、小学校・中学校の国語授業の課題です。

岩城兼先生の『聴覚障害児の言語とコミュニケーション』（教育出版 1986）によれば、幼児の格助詞の使用は、2歳から2歳半の間に、以下の順序で出現します。

野地資料^{*1}: ガ ニ・ヘ ヲ デ マ
デ・カラ ト ヲリ

大久保資料^{*2}: ヲ ガ ヘ ニ デ・ト
マデ カラ ヲリ

この二つの資料から、「ガ ニ ヘ ヲ」は比較的早く出現し、「デ・ト マデ カラ ヲリ」は比較的遅く出現することが分かります。しかしこれだけでは不十分です。岩城先生は、それぞれの格助詞のどのような用法がどんな順序で出現するかを、整理しています。

() 内の数字は、二歳何ヶ月に出現したかを表します。○は [] 内の格助詞が欠けていることを、示します。

■～ガ

チ○ [ガ] デテル (1)
カッコガ ハケン (13)

■～ヲ

アメ○ [ヲ] カウ (1)
オモチ○ [ヲ] イル (4)
テッキョウ○ [ヲ] トオッタ (6)
ボールヲ チョウダイ (7)

■～ニ

オウチ○ [ニ] カエッタ (1) 【空間的移動の着点】

カイモノ○ [ニ] イコ (1) 【目的】
ココニ アルヨ (1) 【存在する位置】
ココニ オイタ (1) 【物を空間的に移動させる着点】

アメカイニ イク (5) 【目的】
ワンワン○ [ニ] ヤル (6) 【やりもらいの相手】

オバチャン○ [ニ] モラッタ (6) 【やりもらいの相手】

アカ○ [ニ] ナッタ (6) 【変化の到達点】
キレイニ ナル (8) 【変化の到達点】

テンジョウニ イル (9) 【存在する位置】

オバチャンニ ミセル (12) 【やりもらいの相手】

オトウチャンニ オコラレル (12) 【やりもらいの相手】

バンニ カエル (13) 【時点】

オジチャンニ モラッタ (14) 【やりもらいの相手】

アシタニ スル (15) 【変化の到達点】

■～へ

エキへ イクンヨ (5)

■～で

オンモ○ [で] アソブ (1) 【動作の環境 (場所)】

ヒトリで○ [で] イク (1) 【動作の環境 (様態)】

チンチンで アソブ (1) 【動作の環境 (随伴する道具)】

でで モツ (6) 【動作の環境 (手段)】

ココで マツ (10) 【動作の環境 (場所)】

ヒトリで (11) 【動作の環境 (様態)】

イッペンで (14) 【動作の環境 (様態)】

アトで スル (16) 【動作の環境 (時間的)】

■～まで

アソコマで イク (10) 【空間的移動の限界】

スムまで マツ (12) 【時間的経過の限界】

■～カラ

ココカラ カエル (10) 【空間的移動の起点】

イマカラ タベル (11) 【時間的経過の起点】

マドカラ ノゾク (15) 【動作の空間的起点】

*1 野地潤家、幼児期の言語生活の実態ⅡⅢ、文化評論出版 1973～4

*2 大久保愛、幼児言語の発達、東京堂、1967

■ ～ト

カーチャント イク (4) 【行動の相手】
ワンワント チガウ (9) 【比較の相手】

■ ～ヨリ

オトーチャンノヨリモ オモイヨ (30) 【比較の起点】

[3] 英語前置詞のコア

英語前置詞のコアは、よく研究されています。E ゲイト英和辞典 (ベネッセ) には、次のような over のコアが載っています。

コアは「(弧を描くように) ……を覆って」で、どこに焦点が当てられるかによって、I～IVの意味を持ちます。⇒は、その中の派生的な



意味です。

I 上を越えて The cat jumped over the fence.猫がフェンスを飛び越えた。⇒ He is over 80kilos now.彼は80キを越えている。

II 真上に The plane is flying over the Pacific Ocean.飛行機が太平洋の上空を飛んでいる。

III 全体を覆う Spread this close over the table.テーブルに布を広げて。⇒ He ruled over the empire for a long time.彼は帝国を長い間支配してきた。

IV 越えた向こうに There's a castle over the mountain 山の向こうにお城がある。⇒ I'm finally over my cold.やっと風邪が治った。

[4] いくつかの格助詞のコア

従来の日本語学習者の格助詞学習は、格助詞「に」について異なる意味の文が出てくるたびに、いちいち覚えていく、ということでした。これでは記憶に負担がかかり、しかも、新しい用例の意味は、なかなか類推できません。

そこで、次のような「コアを用いる学習」が提案されています：

(1) 格助詞、たとえば「～に」のコアとなる意味 (プロトタイプ的な意味) を知る。

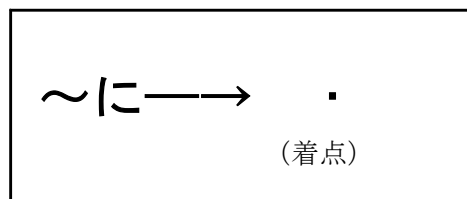
(2) 「に」の個々の文における意味は、コア的な意味からの派生として理解する (派生的意味)。

(3) 派生的意味を、コア的 (プロトタイプ的) 意味や、その他の派生的意味との関連で理解する。

コアを用いる指導法的前提として、まずそれぞれ格助詞のコアを知っておく必要があります。

(1) 格助詞「に」のコア

格助詞「に」のコアとしては、下図のようなものが提案されています (杉村泰、認知イメージに基づく格助詞の指導 [ネットで取得可])。これは、「～に」の意味が、「一方向性をもった動きの結果として、密着する対象 (点) であることを示す」ものと考えます。



「一方向性をもった動き」といっても、さまざまあります。その中でいちばんわかりやすく典型的なものは、

学校に行く。

のような、目に見える動き——空間的な移動——です。「～に」が空間的な移動の着点を示す、という役割が、格助詞「に」のプロトタイプ^{*1}、ということになります。それに対して、

社長に会う／話す。

では、主体が空間的に移動するのではなく、「会う」という行為（働きかけ）——対象に向かっていく行為——を、空間的な移動に移し替えて、——メタファー（比喻）によって——認知していることが、言葉になって表されています。

さらに、

雨から雪になる。

では、「なる」（変化）の到達点を、空間的な移動の到達点に移し替えて認知し、言語表現しています。これは、「会う」のような行為よりもっと高度な認知レベルのメタファーであると考えられます。

子どもの語彙使用の発達を考えたとき、ある単語の「プロトタイプ的な意味」と「派生的な意味」のどちらが先に出現するかと言えば、「プロトタイプ的な意味」が先に出現する、と考えるのが自然でしょう。実際、前掲の岩城調査にお

いて、たとえば、格助詞「に」のさまざまな用法の出現時期をみると〔欠けているものは除き、実際に発話したもののみ〕、

2歳1ヶ月 ココニ アルヨ【存在する位置】

ココニ オイタ【物を空間的に移動させる着点】

2歳5ヶ月 アメカイニ イク【目的】

2歳6ヶ月 キレイニ ナル【変化の到達点】

3歳 オトウチャンニ オコラレル

【やりもらいの相手】

3歳1ヶ月 バンニ カエル【時点】

となっており、「目に見えるもの」から「目に見えないもの」へと、順次出現しています。ただ、プロトタイプ的な「空間移動の到達点」は、2歳1ヶ月のところに

オウチ〇〔ニ〕カエッタ【空間的移動の着点】が記録されていますが、これは「欠けた格助詞」です。プロトタイプ的な用法は、意味がはっきりしすぎていて、わざわざ格助詞を使わなくても通ずるので、「に」を欠いた用法が多用されるものと考えられます。（理解語彙としてはあっても）発信語彙としては、なかなか記録されないのかもしれませんが。さらに精査すれば、きっと最初期の段階に、出現しているものと思われます。

「～に」のさまざまな用法を、まとめたのが下の表です。

空間的移動の着点「～に」を使って、その他の事物の移動の着点を表す例

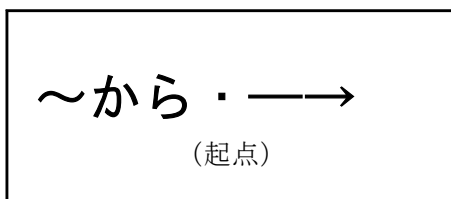
文 例	比喻の起点／目標 ^{*2}	「～に」の意味	コア／派生
学校に行く。	空間的移動の着点	着点	コアの意味
ゴミを川に捨てるな	物を空間的に移動させる着点		
社長に会う。	働きかけ	働きかけの対象	
雨に なる	変化の着点	変化の結果	
買い物に行く	目的	気持ちの向かう先＝目的	
母の実家は、名古屋にある。	存在場所の指定	存在地点	
8時に家を出る。	時刻の指定	時刻	
頭痛に苦しむ。	原因究明	原因究明先	派生的意味

*1 プロトタイプと比喻については、ろう学校教師のための言語学入門（6）、会報11号、2006.7をこらんください。

*2 A（たとえば時間的な経過）をB（ここでは、空間的な経過）の比喻で表すことを、AからBへの写像と捉えて、Aを比喻の「起点」、Bを比喻の「目標」ということがある。

姉は父に <u>そ</u> っくりだ。	比較の対象を求める	比較の対象先
弟に <u>手</u> 伝わせた。	働きかけ	働きかけの対象
四年に <u>一</u> 度の選挙。	割合の基準量を求める	基準量
私に <u>本</u> を買ってくれた。	授受	受益者
友だちに <u>本</u> を買ってもらおう。	授受	授与者
課題に <u>取</u> り組む。	ある対象への行為	行為の対象
国語に <u>算</u> 数に <u>社</u> 会、……。	追加	追加する先

(2) 格助詞「から」のコア



格助詞「から」のコアは、空間的な移動の起点を表します。空間的な移動は、目に見えるものであり、もっとも認知しやすいものです。この、目に見える空間的な移動を使って、目に見えないさまざまな認知が表現されます。

その一つが、時間的移動→空間的移動のメタファー（比喻）です。「近い将来」「遠い過去」は、時間的な隔たりを空間的な隔たりによって表すメタファー表現です。「予行は午後1時から行われます。」の「から」は、時間経過の起点を表していますが、もともと空間的移動の起点を示す「から」が、時間的経過の起点を表す際にも使われているのです。

同様に、因果関係という目に見えない事物の

空間的移動の起点「～から」を使って、その他の事物の移動の起点を表す例

文 例	比喻の起点／目標 ^{*1}	「～から」の意味	コア／派生
新幹線で上野から盛岡に向かった。	空間的な移動	移動の起点	コア的意味
予行は午後1時から行われます。	時間的な経過	時間経過の起点	派生的意味
疲れたから休もう。	因果関係	原因	
ワインはブドウから作る。	製造	原料	
信号が青から赤に変わった。	変化	はじめの状態	
父からほめられた。	働きかけ	働きかけの主体	

以下次号につづく

流れを、目に見える空間的移動のメタファーで表わされます。「疲れたから休もう。」がその例である。

こうした、空間移動の起点⇒因果関係の起点、つまり原因

という比喻は、言語によらず、普遍的なもののようなのです。その証拠として、英語でも、空間移動の起点を表す **from** が原因を表す際にも、使われます：

He died from a wound.彼は傷から死んだ。

He became deaf from the explosion.彼はその爆発で、ろうになった。

このようにして、さまざまな、目に見えない事物の移動・流れが、目に見える空間的な移動のメタファーで表されます。そのとき、空間的移動の起点を表す「～から」が、空間的移動以外の場合にも、用いられる。そうした例を集めたものが次表です。

*1 A（たとえば時間的な経過）をB（ここでは、空間的な経過）の比喻で表すことを、AからBへの写像と捉えて、Aを比喻の「起点」、Bを比喻の「目標」ということがある。